

私と郷土と文学 ⑩

江戸時代の青森県は南部藩と、津軽藩に分かれていた。私が少年時代を過ごした野辺地は南部藩に属し、位置的には陸奥湾に面した津軽藩との境界にあり、藩境警備の要所でもあった。今も藩境の印である饅頭形の塚が残っており、司馬遼太郎「街道をゆく四十一・北のまほろば」(毎日新聞社)に、それが紹介されている。趣向を凝らし最近、土地家屋調査士らがこの藩境塚で津軽、南部に分かれ、綱引きイベントを催していると聞く。また北前船の寄港地として繁栄し、日本最古の灯台といわれる「常夜燈」がある。淡路島出身の高田屋嘉兵衛の生涯を描いた司馬遼太郎「葉の花の沖」(文芸春秋)を読むと、嘉兵衛が蝦夷地交易のために、野辺地を行き来していたことが分かり、上方文化の影響を濃く受けていた所でもある。

言葉の中のふるさと

訪れる機会も少なくなつた野辺地。こうして時おり当地を扱った書物を感じ深く蘇り、「ふるさと」は言葉の中で想うもの」とつぶやきたい気持ちになる。(其田敏美)

風と歩こう ①



Photo by Ryuji Sasaki

新コーナー「風と歩こう」は、文学館の周りの自然に注目したフォトエッセイです。写真は佐々木隆二さんです。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第52号をお届けします。

▽佐々木隆二さんの写真展「回転木馬」をみてきた。作品にわが思いと重なるところがあって感動。文学散歩の時に話の出した「タンベスメリ」を聞いてみたらすぐ水すべりと回答。タンベと伸ばすらしい。当てる漢字はないというけれど、(短)「水滑り」と当ててみたがどうだろうか。(一)

▽庭の隅に放置していた小さな鉢で、酔芙蓉が次々花を咲かせている。昨秋花屋の処分品だったのでダメかもと手入れもせずにいた。心の中で謝りながら、色の変化を眺めている。(近)

▽街路樹の紅葉もすすんで、銀杏が落ちていく。横断歩道を渡るとき、気をつけないと大変なことになる。歩道の隅に団栗を発見することも。子供たちが運んでくる落ち葉の匂いが、エレベーターにももっている日もある。街の中にも季節の色や匂いがちゃんとある。(和)

▽近所から薪ストーブの匂いが流れてくると、古い写真を見つけた時のような懐かしさを覚える。子供の頃、家の外にあったお風呂に薪をくべるのは夕方のわたしの仕事だった。「お風呂が沸きました」と父に知らせるのもうれしかったあの頃、もう遠い昔。(佐)

文友の部屋

※松本幸四郎主演の「ラ・マンチャの男」は、セルバンテスの小説「ドン・キホーテ」を原作としたミュージカル。一九六九年より二〇七回上演された。初演より松本幸四郎がセルバンテスとドン・キホーテの二役を演じている。死のまぎわに、「本当の狂気とは何か」を問う、セルバンテスの独白が胸を打つ。(小林恵子)

恒例の年賀状展

本年度も、文学館主催、友の会共催事業「新春ロビー展100万人の年賀状展」を開催します。今年で第15回を迎える恒例の企画となりました。好きな作家や作品名、作品の一節、自作の詩や俳句、また自由なイラストなどを添えた年賀状作品を募集し、館内で紹介します。多くの会員のみなさんに、年賀状作品をお寄せいただき、ご参加いただきますよう、お願いいたします。

文学の杜 仙台文学館 友の会会報 第52号 平成28年11月30日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内) 〒9810902 仙台市青葉区北根2丁目7の1 電話 022(271)3020 仙台文学館のホームページ http://www.sendai-lit.jp/

第57回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・高橋大翔さん(浦谷町) 晩翠あおば賞・井上彩さん(仙台市) 仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第57回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月23日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、浦谷町立浦谷中学校1年高橋大翔さんの「益棚つた」。晩

晩翠忌記念行事

詩と音楽のひととき「唱歌をうたう」 郷愁を誘うのびやかな歌声

詩人土井晩翠は、明治4年仙台に生まれ、明治、大正、昭和の生涯のほとんどを仙台で過ごした。10月19日の命日の前後には例年、晩翠忌の記念行事が行われる。今年も10月23日に、晩翠わかば賞・晩翠あおば賞の贈呈式が行われ、引き続き記念行事として「詩と音楽のひととき」唱歌をうたう」が開催された。

白のパンツ、15人ほどのお母さん方がここに登場すると文学館のエントランスホールがほっと温かな雰囲気になります。歌ってくださるのは女性合唱団「るるん」ハローモーニー」である。指揮者は仙台的合唱活動に永く携わってこられた海鋒博美さん、ピアノ伴奏はハッ役美保子さん。 「今日23日は晩翠の誕生日なのです」という海鋒さんの初めの言葉に、会場がいさく揺れた。晩翠を偲ぶには恰好の日と思えた。



なお、晩翠忌記念行事として、吉岡一男、高橋昭両氏による「土井晩翠が歩いた仙台」街歩きトーク(10/15)、杜の都にひびけ「荒城の月」市民大合唱(10/19)が実施された。(佐)

文友一滴

大抵の店で、蕎麦湯は湯桶で供される。でも湯桶の注ぎ口は、桶の中ほどから始まっている。それでは蕎麦湯の少しドロツとした、あの美味しいところがいただけません。だから、小さくたって、遠慮がちに軽く回してから注ぐのです。ちょっと恥ずかしい気がしますが、そこで蕎麦湯を調べてみました。今は当たり前前の蕎麦の後の蕎麦湯効能は知られていました。でも蕎麦切りが生まれたころ、花のお江戸では一般的ではなかったようです。なんと蕎麦の後は豆腐の味噌汁が決まりごとだったとか。蕎麦湯は信州の食べ方だった。それが次第に広まって定着したんですね。私も豆腐の味噌汁より蕎麦湯の方がいいと思います。 信州といえば「赤碗に龍も出そうなそば湯かな」という一茶の句がありました。この蕎麦湯は、今のインスタントコーヒーマイみたいな作り方だったのでしようか。同じ蕎麦湯を岩谷山樞子は「用もなく興もなき夜の蕎麦湯かな」と詠みみました。「論争の余燄をさます蕎麦湯かな」こちらは句会の帰りに独りで立ち寄ったのか、それとも会場が蕎麦屋だったのか、河東碧梧桐の俳句です。どちらにしても、蕎麦をたぐっている間は、まだ頭の中に焔が燃っていたのでしよう。 碧梧桐の先生、夏目漱石は熊本時代に「秋雨や蕎麦をゆでたる湯の匂」と詠んでいます。漱石先生、雨宿りだったのかしら。それとも弟子達と座敷で議論していたのかな。そうならば、やはり先生の方が先に冷静になったのですね。(和)

友の会随想

寒い寒い二月頃だったと記憶している。いつものように教室が終り、帰る挨拶をする。「お静かに」と先生が温かな言葉で見送って下さった。

もう40年以上も昔のことだ。その頃、郷里の保健所の栄養室で、栄養士の先生の助手をさせて頂いていた。今のようなグルメとは全く違い、「二日に一回は油を使う料理をしましょう」と言っていた時代だった。

その先生がご自宅で小さな料理教室を開いておられ、そこを私が任されていた。献立はもちろん先生の作成で、栄養バランスを考えたとても地味なもので、すぐに

お静かに(おしんずかに)

友の会会員 松尾 京子

家庭で作れるものばかりであった。生徒さんたちは結婚を控えた若い方々が多かったが、主婦の方々もいてどの年代の方々も熱心であった。あまり作ったことがない献立の週は自宅でも何回もリハーサルをして、母と姉に同じ料理を何度も食べてもらいうんざりさせたものだ。あの頃は今より冬はひどく寒く雪もよく降った。現代のようなエアコンなどはなく、ガスストーブで暖める教室は寒

文学と猫の深い関係

特別展「にやんてつたつて猫」(9/10~11/6)を見る

猫に癒されるという人が多いという現代社会だが、この猫展を見てなんと千年以上も前の平安時代、すでに貴族階級の暮らしの中にステータスシンボルとして猫が飼われていたことを知った。当時の文学作品にも猫が登場する。

『枕草子』八十四段で清少納言は、「引き綱(リードのこと)を引きずって歩くのが愛らしくて優艶美がある」と書いている。

『源氏物語』若菜の巻で紫式部は、綱を付けた猫が走り出たため御簾の端が引き上げられ、源氏の正妻である女三の宮を柏木が垣間見してしまう場面を置き、後の関係へと物語が繋がってゆききつかけを描く。

『小右記』には、貴族の家で盛んに行われた「産養い」を、猫のために行ない、乳母まで任命するのはおかしなことと藤原実資が書いている。この時代には、猫が大陸から輸入された貴重な生き物だった。

猫が一般的な動物となった近現代にも、猫好きの作家は多い。

内田百閒は野良猫を飼いノラと名づけて可愛がった。いなくなった時にはピラを配って探したという。「ノラヤ」の作品がある。

夏目漱石はなんとと言っても「吾輩は猫である」。モデルの猫は全身が黒ずんだ灰色、足の爪まで黒い縞猫と言われている。大佛次郎は並外れた猫好きだった。常に15匹ほどを飼っていて生涯に500匹



大木あま(俳人)：海
小池真理子(作家)：ゴブ、桃、クロ

かった。しかし調理実習に入ると皆よく動き、顔は熱気でほてり、幸せいっぱい表情になるのが不思議だ。生徒さんたちが帰った後、調理器具や火の始末をして、いよいよ帰る挨拶をする。先生は決まって「おしんずかに(お静かに)」と見送って下さった。この言葉は方言で「気をつけて」の意である。今でも思い出すが二月の寒い「えんぶり」の頃のことだ。

「おしんずかに」と送り出していただき家路へ急ぐ途中に、えんぶりがあつた。大きな一般の民家が協力して宿として提供しているのだった。その前を通る時、えんぶりのお囃子の練習が聞こえたものだ。その音色を聞きながら、えんぶりが過ぎると春が待つと、なんとなくほっとするのだった。

井上ひさし資料特集展 vol.6

12月3日から「ドラマ・ウイズ・ミュージック」井上ひさしの音楽世界を開催します。

井上ひさしにとって、「音楽」は作品に欠かせないものでした。人形劇「ひよっこりひよたん島」では、作曲家・宇野誠一郎の音楽と井上の台詞の絶妙な掛け合いが、全国の子どもたちを魅了しました。また、劇作家としてのデビュー作「日本人のへそ」は、ミュージカル仕立ての趣向が凝らされた作品です。

劇作家として活躍するようになってからは、言葉と音楽が、一つに溶け合って形作られるような演劇を作り続け、やがて「ドラマ・ウイズ・ミュージック」と呼ぶようになる独自のスタイルを見つけていきました。

今回の展示では、井上ひさしの生涯を「音楽」の視点から辿り、幼少時代の音楽体験から自身の音楽劇のスタイルを作り上げていくまでの過程に焦点を当てます。創作資料や楽譜資料、さらに音楽に関するエッセイや、参考にしてきた書籍などを紹介します。

角田光代(作家)：トト
町田康(作家・詩人)：ゲンゾー、トナ、ファイ、ビーチ、ナナ、パンク、シヤン
テイ、ササカマ・シゲゾーと多い。

仙台文学館小池光館長の歌に「猫の平熱三十八度五分ゆゑにあたたかきもの膝のうへにある」とあり、猫の体温がそんなに高いことを初めて知って驚いた。愛らしい表情の猫を撮った「岩合光昭 ミニ写真展・ねこ」も同時開催された。(佐)

第27回読書会

へミングウェイ 『老人と海』

海に生きる男の、厳しく豊かな物語

圧倒的な写真描写

10月12日、第27回読書会は1954年ノーベル文学賞を受賞したへミングウェイの『老人と海』を取り上げた。参加者は13名。高校時代に読んだとか、学校の推薦図書だったとか、ほとんどがこの名作を読み知っていたが、当時はあまり感動しなかったとのこと。今回読み返してこんなに豊かで深い小説だったのかと再発見したという感想が多数聞かれた。主人公の年齢近くになって読むことで身につきまされたという声もあった。

鴨等生き物たちのびやかな姿が擬人化して語られる。そうしたとらえ方は日本人の季節感や感性とも共通するもので、老人は決して孤独ではないという感想には皆が頷いた。

彼を慕う少年マノリンとの交流が印象に残ったという感想も多かった。

へミングウェイの小説は映画化された作品もあり『老人と海』は1958年名優スベンサー・トレーシー主演で映画化されている。筆者はつきりグレゴリー・ベック主演だと思っていたが、それは『白鯨』だと勘違いを訂正されたのも面白いことだった。

終了後「ひさしの杜」で茶話会となり、読書会の余韻を楽しんだ。(近)

◇ 次回の読書会は12月14日午後2時から。作品は伊坂幸太郎『イン』(チルドレン)所収 講談社文庫。

◇ ※参加者は会員に限らせていただきます。申込みは友の会事務局まで。



次回の読書会は12月14日午後2時から。作品は伊坂幸太郎『イン』(チルドレン)所収 講談社文庫。

秋の文学散歩

北目町界隈を歩く

スズキヘキの原風景



大日如来での記念撮影

のびながら。会員からのリクエストで「カミフウセン」「アメリアサガオ」を楯吉さんがメロディーにのせ、歌ってくださった。歌まで聴けるなんてなんとラッキーな。楯吉さん自身独語といっているとか。「慕母」の詩は友の会事務局の伊藤美菜子さんがしっかりと朗読。一番笑えたのは「床屋の前の晩方」の詩

全国に先がけて童謡雑誌「おてんとさん」を仙台で誕生させたスズキヘキ。彼の作品のゆかりの場所を歩くことになった。10月28日、集合場所は柳町の大日如来。赤い提灯が目立つところだが、すぐには見つけにくかった。山崎副館長さんは仙台文学館の旗を持って待っていてくれた。旗一本でこれから先の予感が膨らむ。総勢20人、歩くのにまあまあ天気。

解説と案内はヘキの長男鈴木楯吉氏と文学館学芸員の庄司潤子さん。最初にいったのは北目町の相崎旅館。ここは詩「カミフウセン」の生まれ場所。近くにはヘキの旧居跡、「ユキユキドンド」の二十三夜堂、「慕母」の作品に描かれている仙台五橋教会、おてんとさん社発祥の地などを歩きながら、作品と重ねてお話をいただいた。83歳の楯吉さんの記憶力、健脚ともに恐れ入る。

し、詩は文字ではなく声であるとした「カクナシ」など独自の詩論を展開したと楯吉さんは父スズキヘキを熱く語った。スズキヘキを知り尽くしたつもりになった一日だったが今度文学館に行くときは、展示室のおてんとさんコーナーをこれまでとは違った目で見ているにちがいない。早く行って見たい。(一)